

高橋さんの妻  
はるみさんは  
災害公営住宅に配置された  
LSA※でした

当時

※LSA：ライフサポートアドバイザー

いろいろな実践が  
生まれたのよ  
初めての  
ことばかりで  
みんな手探り  
だつたけど

災害公営住宅に  
入居した方の  
生活を支援する  
活動をしていました

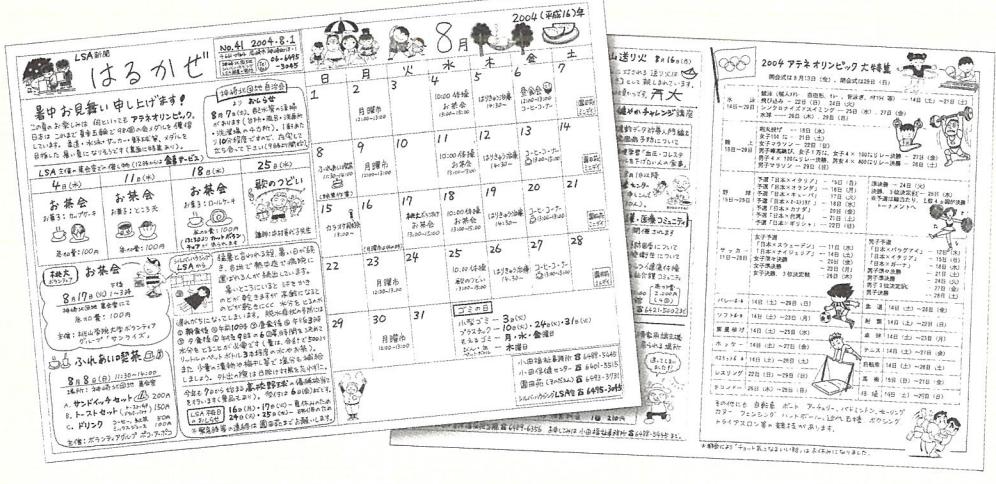
## ・事例1 「お茶会」から「会食会」へ

(尼崎市 市営神崎北団地)

1997年に尼崎市に初めてつくられた災害公営住宅。仮設住宅からの入居者は、新しい機器の使い方や近隣との交流などに不安をもっていたため、LSAが「お茶会」を開催したところ、単身高齢者17人中7人がやってきた。以降、住民同士の顔合わせを目的に、月1回「お茶会」を開催することになった。

このお茶会には、仮設住宅からの引っ越しを手伝ったボランティアグループや学生が主催したものなど、さまざまなボランティア団体が関わった。このお茶会で認知症の夫婦がふともらした「ここでご飯は食べられませんか?」というひとことがきっかけで「ふれあい会食会」も始まった。こうしたボランティアとの交流は、住民だけでなくLSAも元気づけることになり、災害公営住宅の入居者へのサポートに好影響を及ぼした。

また、当初は大学生がボランティアで作成したコミュニティ新聞を入居者に配付していたが、その後、名称を変えて自治会、民生児童委員、地区社協等で構成される委員会が発行するようになった。必要だと思うものは、周囲の力を借りて、仲間をつくること——これが資源づくりの第一歩である。



・事例2

## ボランティアグループをつくるて喫茶オープン

(宝塚市 県営福井鉄筋住宅)

県内各所の仮設住宅から抽選によって移り住んだ人が多い災害公営住宅のため、入居者同士のなじみが薄いという特徴があった。そのせいか、校区のまちづくり協議会が町内の会館で食事会を開催しても、なかなか継続して参加する人が少ないという状況だった。

ならば、地域から災害公営住宅へ出向いて、そこの集会所で喫茶を開こうと地域住民が立ち上がった。民生児童委員が中心になってボランティアグループ「ぐるーぷなか」を結成し、2006年7月に「喫茶ほんわか」をオープン。月1回開催している。

2008年からは、食事会「1日ゆったりの会」を開始。食事会に参加できない人には、自宅へ食事を届け、その際に会話を楽しんだり、つながりが途絶えないような工夫をしている。集会所を利用し、災害公営住宅だけでなく地域全体を支援することが、成功の鍵となった。

・事例3

## 災害公営住宅の自治会が「ふれあいいきいきサロン」開催

(宝塚市 市営安倉南住宅)

1997年の入居の年に、災害公営住宅内に自治会が発足した。市社協のサポートもあり、その2年後に自治会役員を中心に週1回の「ふれあいいきいきサロン」が始まった。周辺地域へもチラシを配付し、参加を呼びかけたことで、地域との交流が生まれた。ほかの災害公営住宅の自治会との交流や関係機関との情報交換会を開催するなどさまざまな活動に発展。今では市社協との協働で、週1回総合相談窓口を設けている。



・事例4

## 集会室を活かして周辺地域と交流

(姫路市 県営姫路勝原第2鉄筋団地)

この地域は、県営住宅周辺の分譲住宅群が一つの自治会だったため、自治会が災害公営住宅2棟(うち21戸がシルバーハウジング)の住民をみんなで受け入れようという意識があった。

災害公営住宅に配置されたLSAは、元からいる住民と新しい入居者のパイプ役を意識して動き、双方の交流を深めるために「ふれあい親睦会」も開催した。

また、災害公営住宅内の集会所は、自治会の会館として地域住民が気軽に立ち寄れる地域拠点となり、「あそこへいけば誰かとおしゃべりできる」と住民の出入りの絶えない、にぎやかな場所になった。



福島民友 6月23日

**連携強化へ自治会設立 白河地方に避難の富岡町民**

**石巻市 復興住宅コムニティー 対策**

**町内会との融和も支援**

**きらめく黄金浜対象に事前説明会**

**入居者の「顔合わせ」実施**

**岩手日報 11月12日**

**県内35団地の8割**

**災害公営住宅 進む自治会設立**

**震災3年8カ月**

**心も温かお膳り飯**

**石巻かほく 7月26日**

**新たな絆 仙台育てよう**

**今秋にも入居開始**

**灾害公営住宅**

**糸維持へ「グループ」導入 定員超なら抽選**

**暮らしの復興思いはせる 南三陸・町内初の災害公営住宅見学会**

**来年度中 3700戸**

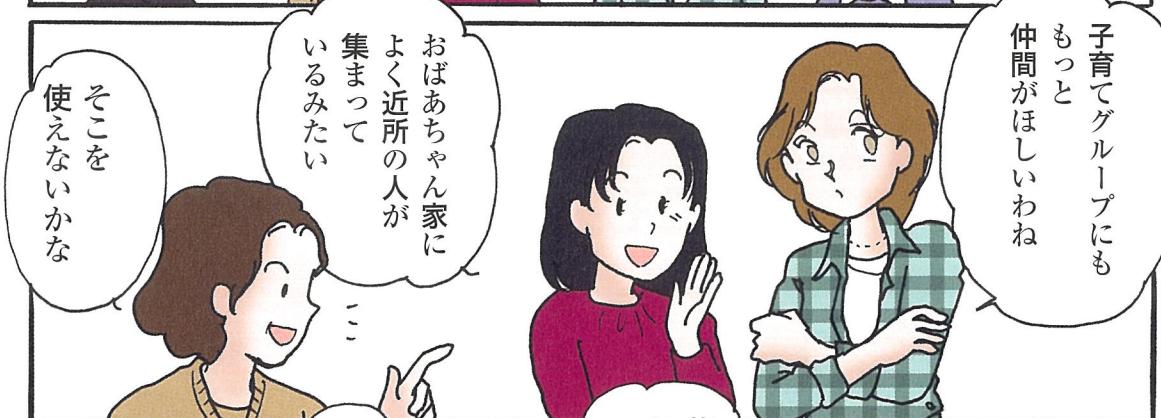
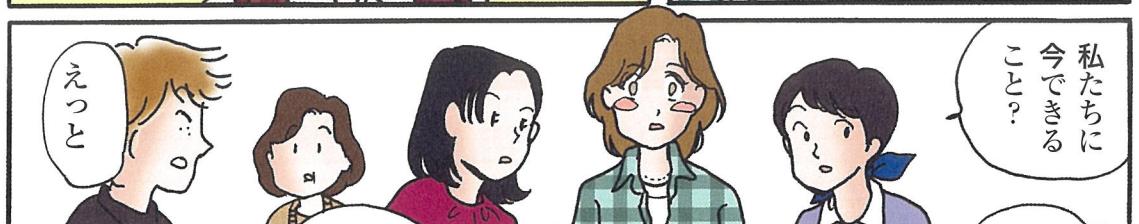
**河北新報 9月29日**

**福島民報 6月11日**

**福島民友 6月23日**

**福島民報 7月13日**

**※新聞記事はすべて 2014年**



始めるときに  
たいせつなことは  
災害公営住宅に  
入居する人たちと

一緒に  
すること  
なんだ

高校生の  
僕に  
できることも  
あるだろうか?

それが  
コミュニティ  
づくり  
なんだよ

同じ住民に  
なるん  
だものね

そうだね

小学生の  
勉強くらい  
だったら  
みられる  
でしょう。

そうか  
僕も転校して  
きたとき  
なじめなかつた  
からね

よかったです

子どもたちと  
遊び  
ボランティアなら  
できるん  
じゃない?

行政の  
担当者に  
聞いてみます

その周辺地域  
全体で使える  
ものにできると  
いいですね

ここにできる  
集会室を  
災害公営住宅と

大学生の力も  
借りて  
子どもの  
学習ボランティア  
をやって  
みようかな

入居から一ヶ月

歓迎会と  
記念植樹が  
行われた

集会所

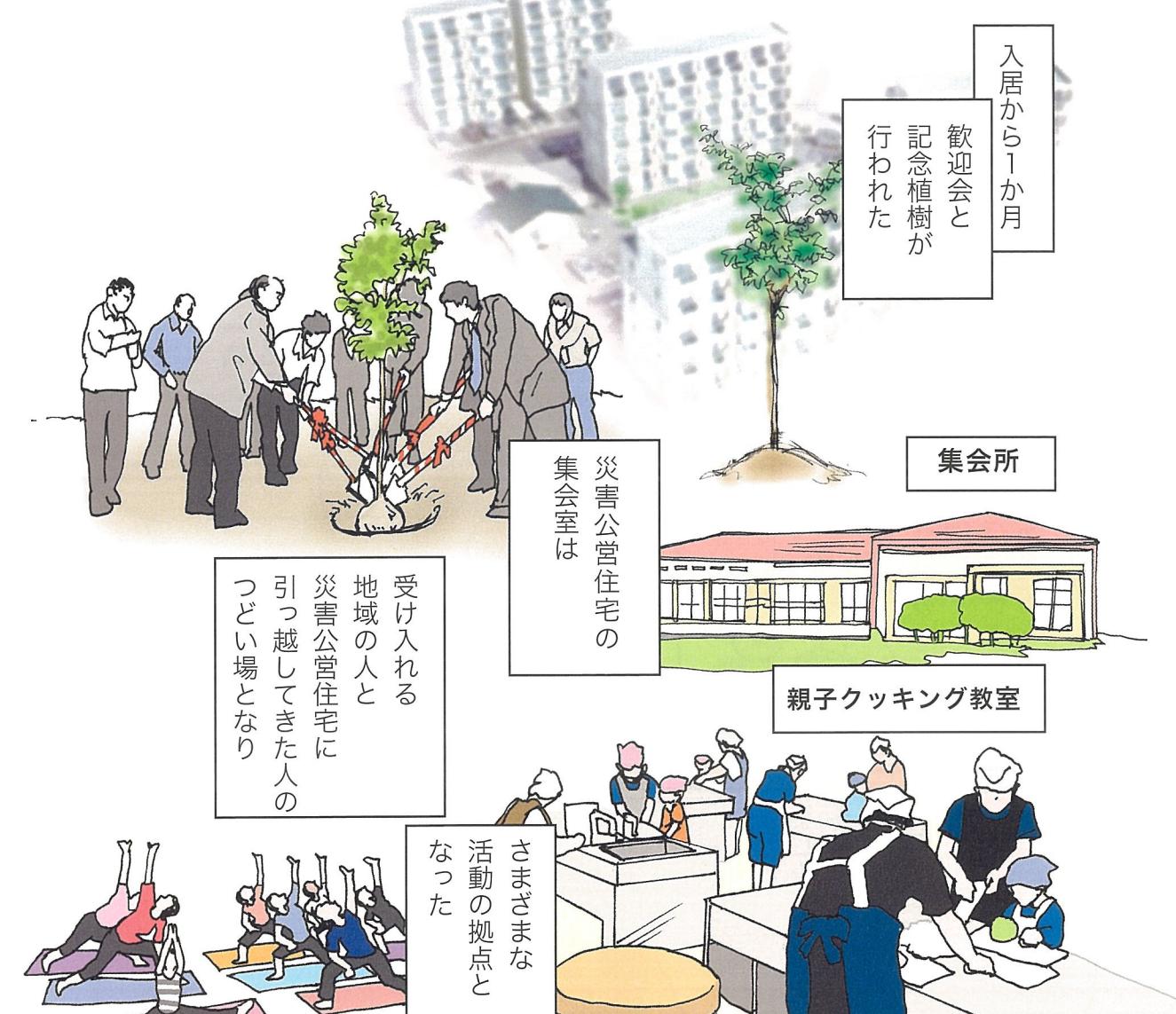
災害公営住宅の  
集会室は

受け入れる  
地域の人と  
災害公営住宅に  
引っ越してきた人の  
つどい場となり

さまざまな  
活動の拠点と  
なった

親子クッキング教室

子どもが  
うるさく  
ないかしら？







## 談話室

あれ

お茶持つて  
くるの忘れた

地元の人だわ。

ありがとうございます

よかつたら  
どうぞ

金こころ  
のび



周辺地域の  
除草作業を

一緒に  
やつたり



ジュニア  
ボランティアによる  
見守り活動も  
行われ

いろいろな  
イベントが  
行われ

地域の情報報告  
のせています

僕たちの  
つくった  
広報紙です

運動会  
夏祭り



そして  
1年が過ぎ——

Xmas会

交流を  
深めていった

自治会  
農作秀

田代代表



そして

30年後

集会所

## 地域ケア 会議

この木も  
大きく  
なつたなあ  
鈴木

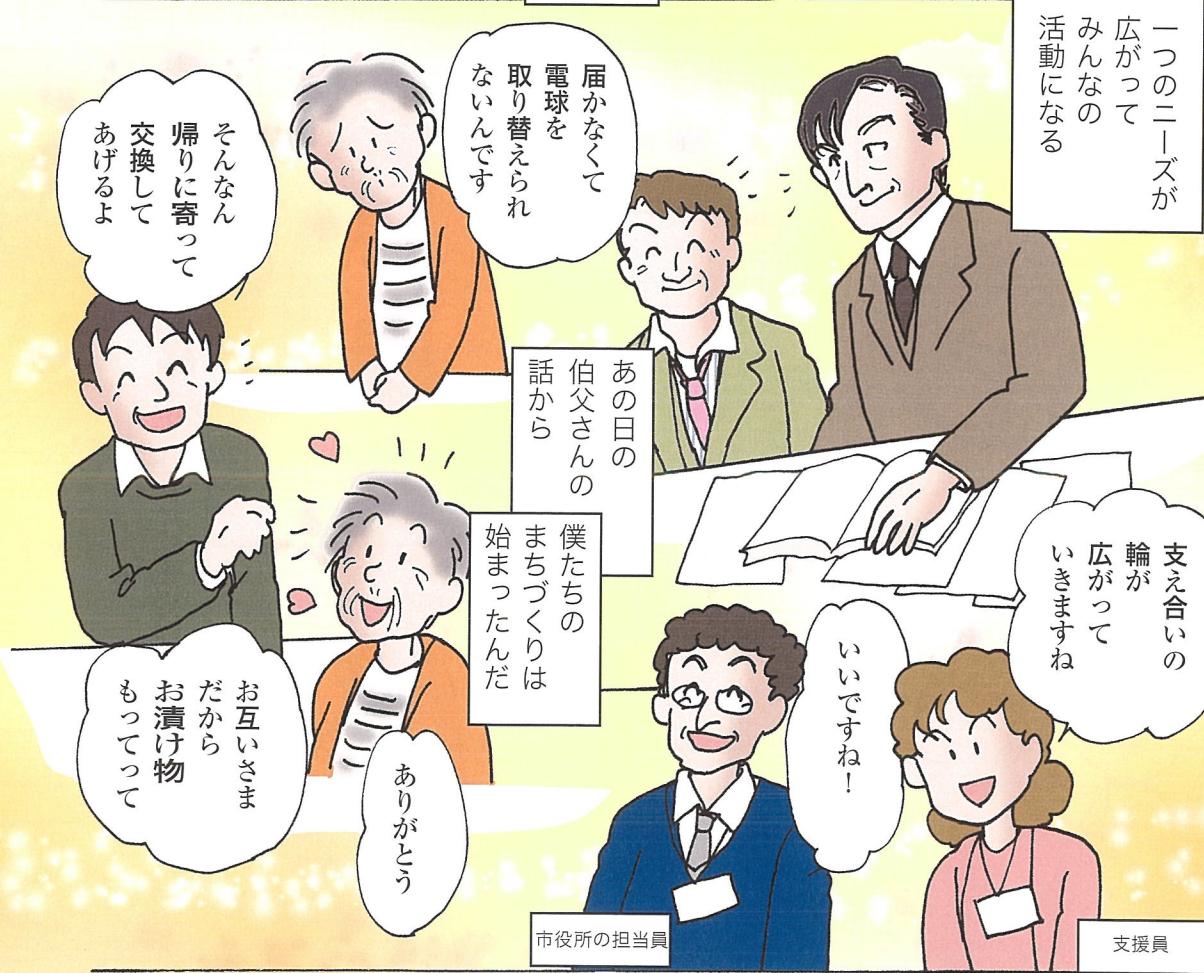
お前とも  
長いつき合い  
だなあ  
藤原

ボランティアに  
始まつて  
役員やら祭りの  
実行委員やら

なんでも  
言つてみて  
ください

日ごろ  
困つて  
いることや  
気になる  
ことがあつたら





自分に  
できることを  
という

伯父さんの  
言葉が  
きっかけに  
なって

地域の人と  
災害公営  
住宅の人が  
一つになって

自分たちの  
居場所を  
つくったんだ

30年前に  
みんなで  
知恵を出して  
考えた  
さまざまな活動が  
養分となつて  
大地にしつかり  
根を張ったんだよ



## 解説②

# 災害公営住宅が建つ 地域住民の視点

## —受け入れる際の留意点

●大坂 純

仙台百合女子大学 教授

### ●被災者の立場を理解する

被災者は、新しい地域に慣れるまで相当の努力が必要とします。これは時間のことだけではありません。これまで慣れない地域での暮らしをしてきた被災者は、再び慣れない地域での生活を強いられます。もちろん、これまでの経験を活かして地域に溶け込むことのできる人もいますが、高齢化や障害や疾病の重度化、仮設住宅での生活疲れといった理由から地域に溶け込むことができない人が少なからず存在するということです。

このような人への働きかけのポイントは、あせらずに相手のペースに沿って始めるということです。時間をかけること、待つことを忘れないこと、相手を理解することを念頭におきましょう。

### ●ともに地域をつくる姿勢

受け入れ地域の人たちはただ受け入れるのではなく、ともに

住みよい新しい地域をつくっていくという姿勢が求められます。そのためには、被災者であることを際立たせないおつきあい、違いを認め合い、折り合いをつけてゆく関係性をつくることがたいせつです。

### ●もともとの地域にある課題を共有する

被災者にとっては、新しい地域で日常生活を整える時期になります。また、受け入れる地域の人にとっては、新住民を迎えて新しい地域づくりをする時期です。地域の住民側は、環境の変化が起ることではないかと心配する人や、自分たちの生活にも影響があるのでないかと考える人も少なくないでしょう。

特に、災害公営住宅が建つ地域では、入居者の高い高齢化比率の問題や地域での孤立などの問題が心配されます。しかし、このような問題は、災害公営住宅だけの問題なのでしょうか。決してそうではありません。受け入れる地域においても、高齢化や地域支え合いの希薄化などといった課題は、少なからず存在します。災害公営住宅が建つことによって新しい課題を抱えるのではないか、という意識をもつことがたいせつです。迎え入れる住民の皆さんは、地域にあるさまざまな課題を、新しく加わる住民の皆さんと共有し、ともに支え合うための仕組みをつくることをしっかりと意識しましょう。

そのために重要な視点を3つ上げます。

## 1 「理解し合つ伝え合つ」という視点

お互いを理解するには、時間が必要です。受け入れ地域の皆さんから、地域の文化や伝統などのよいところをたくさん伝えましよう。また、災害公営住宅に入居する人たちがどういった仕事をや暮らしをしてきたのかといった、これまでの経験などをよく聞くという姿勢もたいせつです。

## 2 「将来を見据えた関係づくり」という視点

最初はぎくしゃくすることも少なからず起ります。住民一人ひとりが、その人らしく住み続けることができる地域づくりには、旧住民と新住民の間の隔たりは必要ありません。今だけを見るのではなく、遠い将来をも見据えた地域づくりをともに行っていくのだ、ということをしっかりと意識しましょう。

## 3 「認め合う関係づくり」という視点

第1の視点と第2の視点で関わるとき、「認め合う関係を意識すること」で、2つの視点による関わりがうまくいくことになります。災害公営住宅が、終の住み処となる人たちもいらっしゃるでしょう。ともに新しい地域づくりをすることは、苗木を植えて育てていくようなものです。理解し合い、伝え合うという視点や、認め合う関係づくりが、成長に必要な水や肥料になります。そして、将来、住みやすい地域という大木に育つを思い描いて活動を始めましょう。

「誰もが住みやすく、自慢できる地域」という青い鳥は、皆さんすぐそばにあります。さあ、日々の暮らしから青い鳥を探す活動を始めましょう。

## ●でもないひいからむつくり始める

「新しい住民を受け入れてよかつた」「新しい地域に移り住んでよかつた」と思える地域。そして、「誰もが住みやすく、自慢できる」地域をつくることは、決して難しいことではありません。災害公営住宅ができると聞いて起る不安を取り除くためには、阪神・淡路大震災の教訓と、災害公営住宅の内容を理解することが重要です。阪神・淡路大震災での経験を東日本大震災の復興に活かすことが東北の復興を早めることになります。

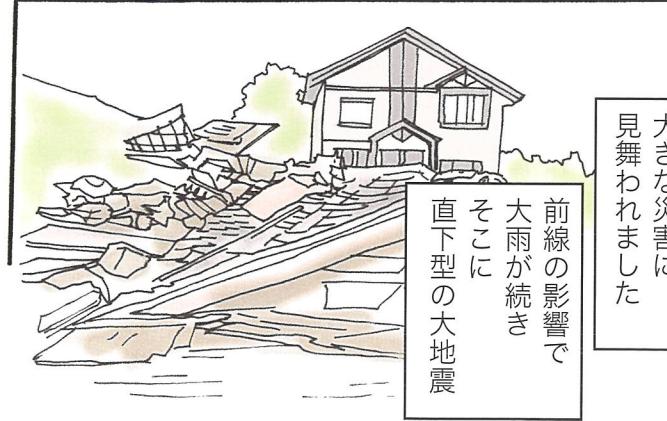
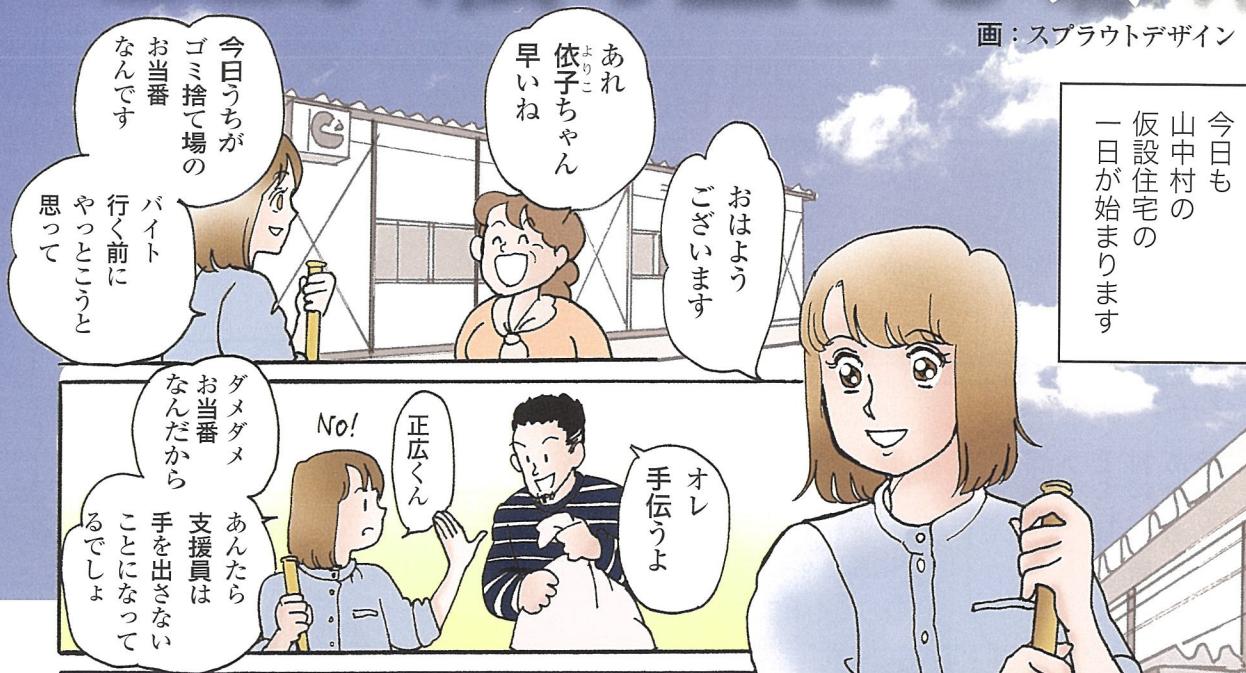
また、新しい地域づくりは日々の生活から始まります。普段何気なく暮らしている皆さんの地域にも、皆さんのが築き上げてきた地域の文化や伝統があります。また、災害公営住宅の入居者の皆さんにも、それぞれの地域の文化と伝統を何気なく活かした生活がありました。ともに新しい地域を築くということは、地域に暮らす人々が日常生活を見つめ直す機会でもあります。日々の暮らしを基にした住民同士のおつき合いが、住みやすい地域をつくる大きな要素になります。認め合い、支え合う誰もが住みやすい地域づくりは、できるところからつくりと始めましょう。

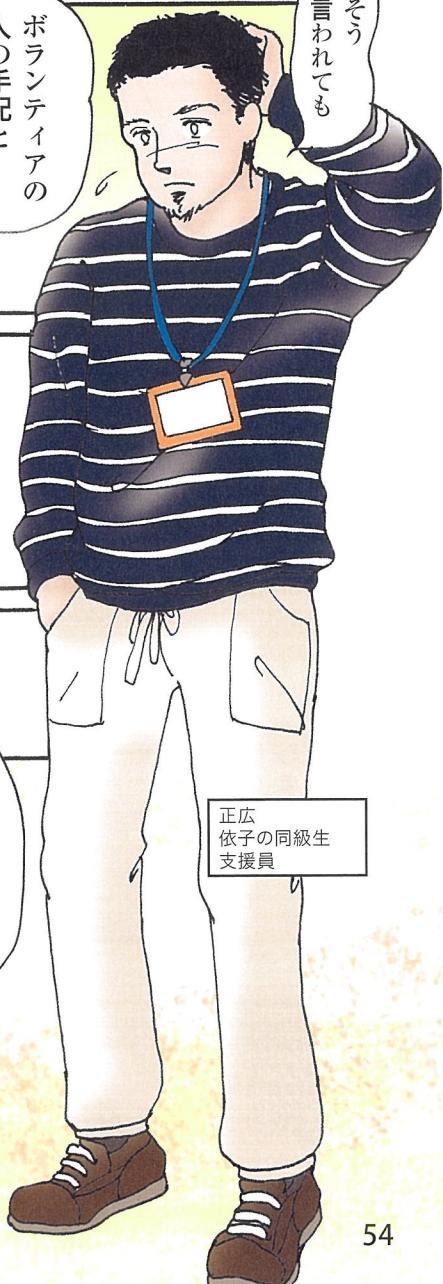
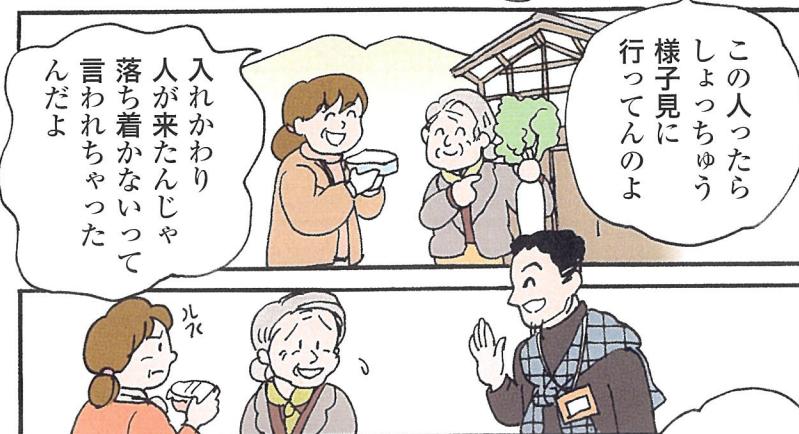
「誰もが住みやすく、自慢できる地域」という青い鳥は、皆さんすぐそばにあります。さあ、日々の暮らしから青い鳥を探す活動を始めましょう。

# ここが、私の生きる場所

画：スプラウトデザイン

今日も  
山中村の  
仮設住宅の  
一日が始まります





正広くんは  
村出身でした  
が  
小学生の時  
ふもとの町に  
引っ越し  
ました

災害後の  
サポートのために  
支援員として

村に戻つて来たのです

うんスイ!

山中村のみんなは  
山での暮らし  
そのままに  
生活していました

村のコミュニティや  
人間関係も  
そのままに  
仮設住宅で続いて  
いました

全国から寄せら  
れる支援物資や  
ボランティアの  
手配に  
追われていると  
いうことでした

支援員の仕事は  
ゆるやかに  
見守りを  
するとともに

見てみな  
このあいだの  
アンケートの  
結果が出た

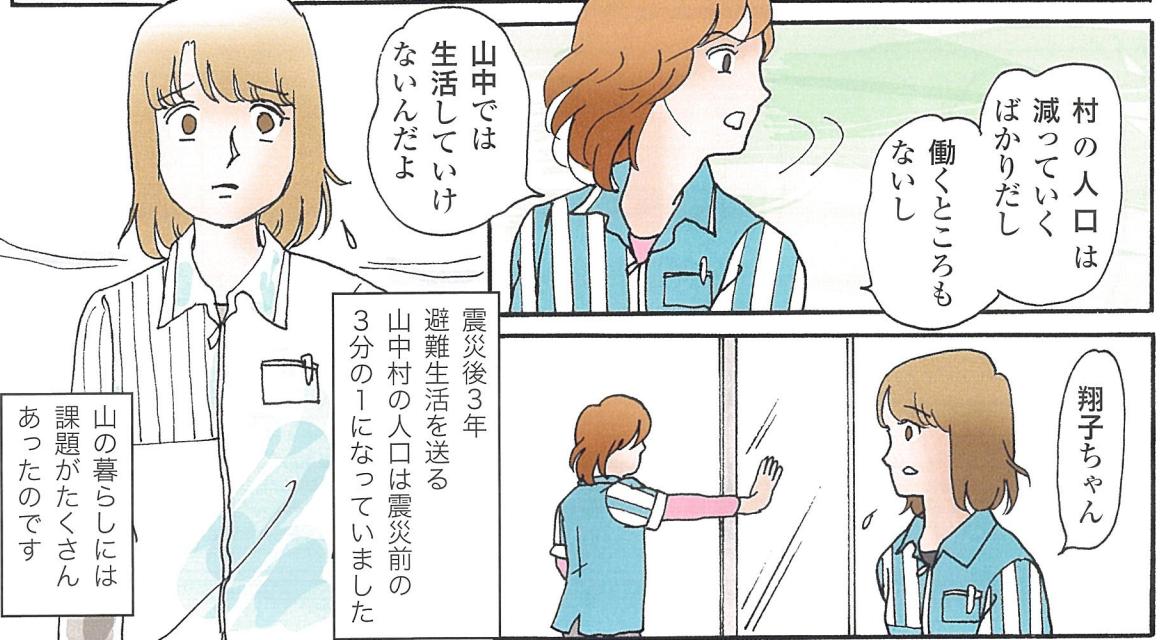
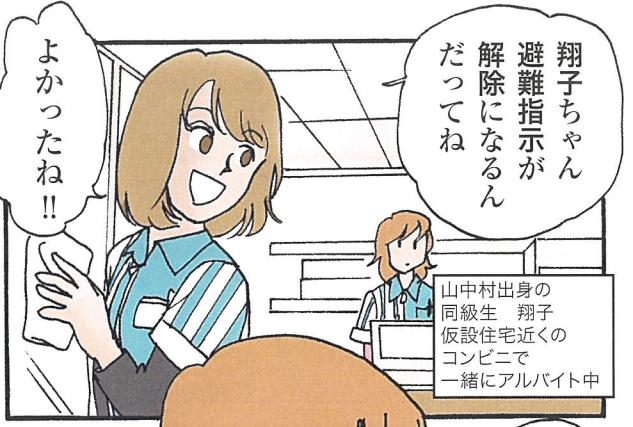
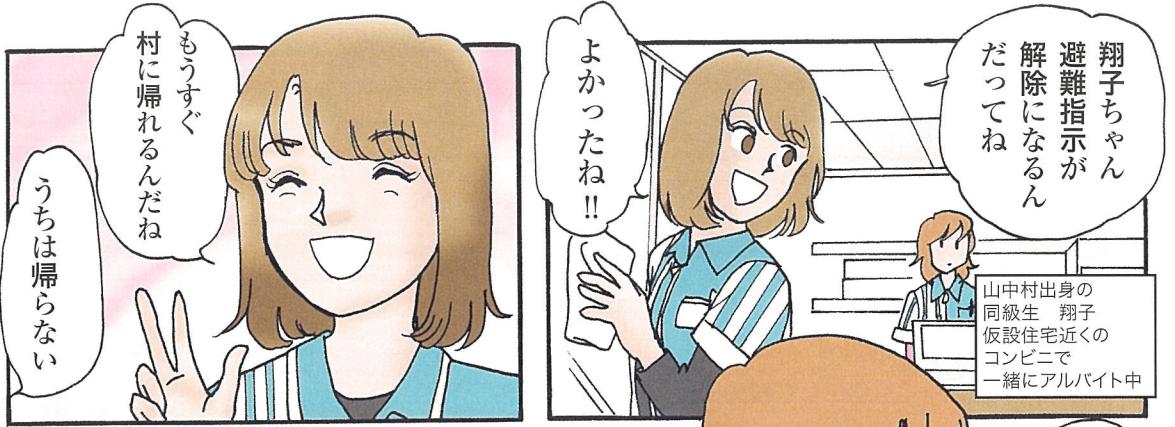
お帰り  
今日は  
集会所の  
寄り合い  
どうだった?

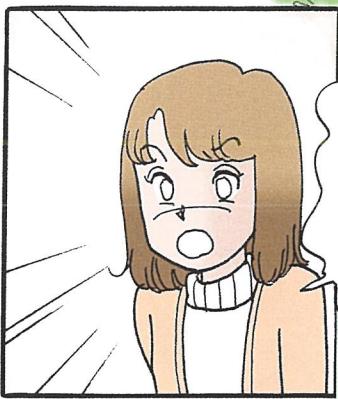
ただいま  
父 祖父 村長  
しげはる 依子の兄 茂治

それは  
村のみんなの  
心の声でした

- ・できるだけ早く帰りたい
- ・公共設備が整わなくて  
不便でも帰りたい
- ・公共設備が整えば  
帰りたい

「帰りたい」  
合計が92%  
だつてさ





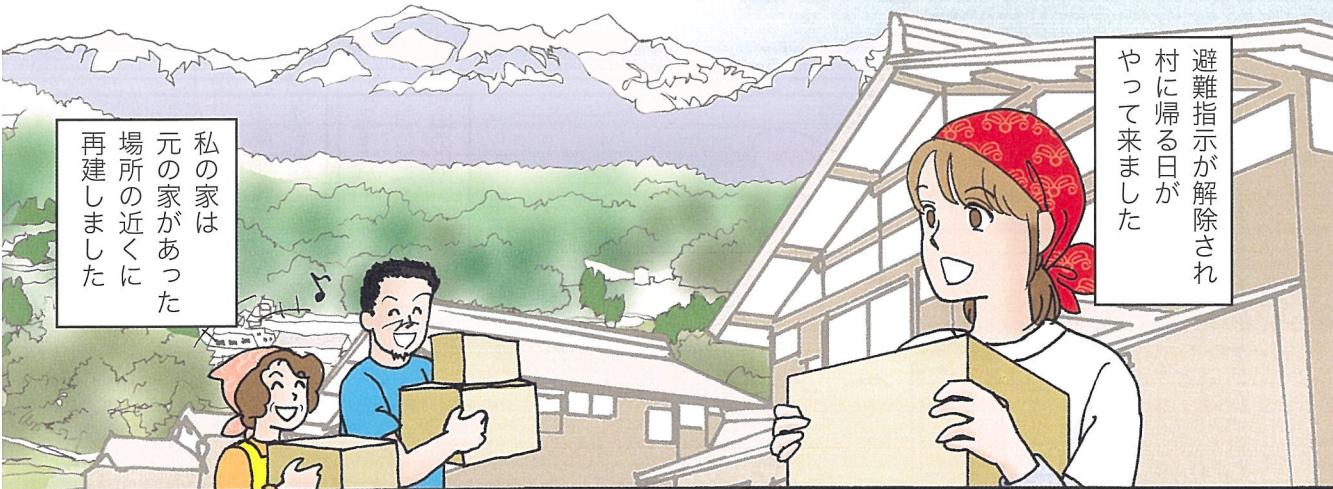
仮設住宅に避難  
していた住民の  
ほとんどは  
村に帰ることを  
選んだのでした

帰ろう  
山中村へ!

町は便利だけど  
やつぱり  
山の村がいい  
新しく  
村に戻つて  
村の生活を  
始めるんだ

避難指示が解除され  
村に帰る日が  
やつてきました

私の家は  
元の家があつた  
場所の近くに  
再建しました



自主再建の困難な人や  
希望する人には  
災害公営住宅も  
建てられました

町場の  
マンションではなく  
山の生活に  
合った造りの  
戸建、長屋、  
二軒が一緒になつた  
造りの  
3種類の「家」が  
建てられたのです

最初は  
町場の住宅と  
同じような  
設計だつたんだよ

雪が降んだから  
屋根は  
こんなじやダメだとか  
何回も直して  
もらつたんだってさ

おおつ  
これが新しい  
公営住宅か

昔住んでいた  
家に  
そつくりだ



山村の  
災害公営住宅は  
生活しやすい  
ように

自分の畑に  
通えるように  
生活していた場所  
もしくはその近辺に  
建てられました

